法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

サンーシモンの社会組織思想における市民社会と国家(1)

HIROTA, Akira / 廣田, 明

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社会労働研究 / Society and labour
(巻 / Volume)
20
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
93
(終了ページ / End Page)
119
(発行年 / Year)
1974-02-15
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005944

サン－シモンの社会組織思想における市民社会と国家(一)

広田　明

「労働すれば三つの大きな不幸から遠ざかることができます。すなわち退屈と悪習と貧乏とです。」
「われわれはとにかく己れの畑を耕す必要があります。」
（ヴォルテール『カンディード』[1]）

「すべての人間が働くであろう。かれらはみな自分たちを一つの仕事場に結びつけられた労働者と目するであろう。」
（サン－シモン『ジュネーブの一居住民の手紙』[2]）

目　次

序論　サン－シモン研究の枠組と問題の所在（本号）
第一章　市民社会と国家（以下次号）
一　サン－シモン国家論の変容
二　サン－シモンとセー
三　夜警国家論の自己矛盾
四　社会組織の顚倒性

五　近代国家観の批判
第二章　産業アソシアション（以下続号）
第三章　国家の衰滅
結び

一　序論　サン＝シモン研究の枠組と問題の所在

いわゆる三大「空想家」（「空想的社会主義者」）の一人に数えられているクロード＝アンリ・サン＝シモンは、フランス革命の激動がナポレオン統領政府の成立として終息した数年後（一八〇三年）に、人間の「幸福」・「人類の境遇の改善」[3]を可能ならしめる「新しい社会組織」[4]の探求者として思想史の舞台に登場した。かれが四三才の時である。それ以来かれは、約四分の一世紀にわたるフランス社会史の矛盾にみちた展開――祖国防衛戦争の侵略戦争への転化。ナポレオンによる革命の遺産の独占、最高権力の集中と第一帝政の成立。ナポレオン体制の崩壊とブルボン復古王政の成立→反動化。市民社会[5]と復古王政との対立。共和主義思想の復活・自由主義思想の興隆と「神政派（テオクラット）」の正統王朝主義の立場からの市民社会批判。そして資本と労働の矛盾の端初的発生など――のなかで、いくたびか自己の思想の破産の危機に直面しながらも、社会変革の理想を捨てさることなく[6]、状況の変化に密着したドラマチックな理論・啓蒙活動を持続したのであった。晩年のマルクスが「ひたすら驚嘆の言葉をもって」言及したといわれている、かれの「百科全書的頭脳[7]」が生みだした思想（の断片）はまことに多彩であって、「厳密に経済的な思想ではなかったけれど、後代の社会主義者たちのほとんどすべての思想が萌芽としてふくまれていた[8]」とされている。

しかしいま、「産業主義」industrialisme と総称されているかれの後期（一八一六―二五）の思想に対象を限定し

てみるならば、最後の作品『新キリスト教』（一八二五）以前の著述は、「すべて、事実上、封建社会に較べての近代ブルジョワ社会の賛美、または、ナポレオン時代の元帥や法律製造業者に較べての産業家や銀行家の讃美にすぎない」[10]（マルクス）と評価されてきた。このマルクスの評価は、サン-シモンにおけるブルジョワ的傾向と、プロレタリア的傾向の「共存」というエンゲルスの評価[11]につらなるのであるが、マルクスにあってもエンゲルスにあっても、「空想的社会主義者」サン-シモン像と「ブルジョワ社会の賛美者」サン-シモン像とがいかに内面的に連関するかについては、十分説得的に答えられているとはいいがたい。その結果、サン-シモンが「社会主義者であったかどうかが、しばしばうたがわれ」[12]ることになり、ヨーロッパの多くのマルクス主義者がこの点で否定的な見解を提示することになった[13]（その最も典型的な例は、ガロディーの旧作[14]）。

わが国の研究史もまたこのヨーロッパの潮流と無関係ではなかった。しかし、わが国の研究者はヨーロッパの「マルクス主義的『通説』[15]」に安易に組することなく、困難を打開しようとした。その代表的な事例の一つは、ホッブスとアダム・スミスを中心として近代社会観成立史の解明に従事してこられた水田洋氏の研究（『社会主義思想史』）であり、水田氏の結論から出発してサン-シモン像を再構成された坂本慶一氏[16]の作品（『フランス産業革命思想の形成』）であった。すなわち、水田氏は、（恐らくマルクスのサン-シモン像から触発されて）サン-シモンを「アメリカの純粋培養型資本主義」の賛美者[17]ととらえ、封建遺制の打倒＝純粋資本主義の構築、あるいはフランス資本主義の全面的開花という視角から、次のようにサン-シモン像を総括された。「サン-シモンは、一九世紀初頭のフランスの、封建遺制にたいして、産業体制を樹立しようとした。『一八一五年から一八四八年までの全期間にわたって、工場制はいぜんとして幼弱であり、家内工業がむしろつよかったから、労働運動は、ほとんど子供らしい端緒をこえなかった』

のであって、プロレタリアートの独自の主張が、理論化されるにはいたらなかった。だがまさにそれゆえに、スミスとちがってサン-シモンは、産業体制の樹立を、体制変革として、しかも労資未分化の生産者の要求として、意識することができたのである。サン-シモンのブルジョワ性をみとめることと、かれを空想的でも社会主義的でもないとすることは、まったくべつの意味をもつのであって、かれはこれまでのべてきようなブルジョワの立場をとることによって、体制変革的＝空想的となり、社会主義の先駆者となるのである。[18]」また、水田氏の結論から出発された坂本氏は（前掲書「序論」参照）、エンゲルスによるサン-シモン思想の「二重評価」に則して研究史をサン-シモンの「ブルジョワ的側面」ないしは「プロレタリア的側面」のいずれか一方を強調するもの、および第三の評価を示すものの三つに大別されて、結論的にかれについての評価が多様であって「一人一説の観さえしないでもない」ことを確認されたあと、氏自身もまた「サン-シモンの産業主義＝〔フランス〕産業革命の思想」という第三の評価を示されたのである。[19] この点に関して氏はこう述べている。「わたくしは、一般的にいって、サン-シモンの中心思想をなすものは、……産業主義の思想であると考える。そしてさらに、かれの一般的観念としてこの産業主義思想は、その現実的、実践的な観点からみれば、フランス産業革命の思想とよぶにふさわしい思想の形態と内容とをそなえていると考える。[20]」かくして、坂本氏は「少なくともフランスにおいては『資本主義的生産の未熟な状態、未熟な階級状態には未熟な理論が対応した』（エンゲルス）というよりも、むしろ未熟な社会状態に〔産業革命思想として〕早熟な思想が対応したということができる。[21]」と主張されたのであった（原典ないし研究書からの引用文中における〔　〕内は、引用者の補足。傍点は原著者のもの。以下同様。）なお、坂本氏のサン-シモン解釈が水田説の「発展」であったかどうかは一義的には言えないが、水田説と坂本説とは、サン-シモンの産業主義を反封建（遺制）＝純粋資本主義構築の

思想とみる点で、共通点をもつのである。

こうして、わが国の研究史においては、サン-シモン解釈における反封建＝純粋資本主義の視角が、一つの伝統として定着したのであった。この視角は、サン-シモン思想が資本主義発達史において有した役割のポジティブな評価を可能にした。しかしながら、この視角の定着がかえってサン-シモン像にある歪みを生みだしたのではないか、とわたしは考えている。というのは、サン-シモンの産業主義には、市民社会と政治的国家との分離＝二重化の矛盾あるいは市民社会と政治的国家の二律背反にかかわる問題と、この難題解決のための理論的示唆が、（十全に推稿されつくしたとは言えないし、明確な経済学批判のうらずけを欠いているとはいえ、通常予想されるよりもずっと）豊かに開陳されているにもかかわらず、純粋資本主義論の視角はこの問題を十分にくみあげていないからである。このことは、反封建＝純粋資本主義の視角が固有の国家論を欠落させていることを、あるいはこの視角ではサン-シモンの近代国家批判をその視野のなかにとりこめないことを物語るものといえよう。

これに対して、サン-シモンの国家論に関してはすでに、政治的統治を物の管理と生産過程の指導にかえることを目ざす、いわゆる「国家廃止」論の先蹤というエンゲルスの古典的規定[22]が知られているから、マルクス主義（とりわけ史的唯物論）との関連でサン-シモンさらにはフランス社会主義をとりあげた人々には、右の問題の所在がある程度念頭にのぼっていたはずである。にもかかわらずそうした論者の多くは、マルクス・エンゲルスの（書き残された）解釈を追認ないしは固定化するにとどまり、サン-シモンの思想への内在をふまえて、かれの所説に則した形で、サン-シモン像を論理化＝再構成する作業を放置してきたように思われる。[23] マルクス自身はかれのサン-シモン像を書き改める意図をもっていたらしい[24]のであるから、この作業は不可欠であったのに。

もっとも、こうしたサン-シモン研究における反封建＝純粋資本主義視角の優位とでもいうべき状況が存続しえているのには、ここにみたような思想史研究における「イギリス的方法へのよりかかり」[25]とマルクス研究の側からのフランス社会主義研究のたちおくれだけでなく、「特殊」(?) サン-シモン的な事情が大いにあずかっている。その事情としてさし当って考えられるのは、次の三点である。①後期のサン-シモンの思想形成の出発点をなす編者『産業論』(一八一六―一八)では、いまだ反封建＝純粋資本主義の思想家という解釈を許すような個所が、(読みようによっては)随所にみられること。しかも、②本書でかれは、J-B・セーをはじめとするフランス自由主義の国民経済学者たちの所説を媒介にしてかれの初期の思想の認識論的限界を克服し、新しい認識原理(産業＝生産決定論)を提示するのであるが、[26]国家論に関してはほぼ全面的に夜警国家論にくみしていること。さらに、③後期のサン-シモンの「封建制」(ないしは「旧体制」)概念は、社会・経済史にいう前近代社会あるいは旧体制といういみでの「封建制」よりも広い概念として用いられている――より正確にいえば、サン-シモンのこの概念はいわゆる「封建的(前近代的)」なものと、近代市民社会における「統治関係」に集約されるところの政治的な支配・服従の関係との両方を指示するとともに、一般的に「人間による人間の支配」(イデオロギー支配をふくむ)の集中的表現としても用いられている――にもかかわらず、論者がこれを一義的に社会・経済史的概念と同義のものと了解してしまったこと、[27]以上の三点が考えられる。

だが、もしサン-シモンが反封建(遺制)＝純粋資本主義のイデオローグにとどまったとするならば、かれは「何故に」わざわざ産業主義の構築に努めねばならなかったのだろうか。これは、反封建＝純粋資本主義の視角では解けない問題である。なぜなら、啓蒙主義と自由主義こそ真正の「反封建」理論だったのだから、サン-シモン産業主義

の第一義的な理論的＝実践的な課題（あるいはねらい）が封建遺制の一掃＝純粋資本主義の確立にあったとすれば、かれは安んじてこれらの思想のエピゴーネンたりえたはずだったからである。[28] ところが後にみるように（第一章、第一節および第五節）、とりわけ『組織者』以後のサン-シモンは、新しい社会組織理論の構築のために、外ならぬ夜警国家論の「国家幻想」と近代自然法思想の市民国家形成原理とを、総括的に批判したのであった。また、自由主義者がサン-シモンの産業主義を同根の異物とみなして忌避するにいたったこと、あるいは逆にかれらがサン-シモンの思想と経済的自由主義との出発点の同一性を強調したり、対立点をあいまい化することによって、ことさらにサン-シモン思想の独自性を消去しようとしたことは、[29] サン-シモンの産業主義が単なる反封建＝純粋資本主義の理論ではないことを、いみじくも物語っているのである。

サン-シモンはかれの産業主義の独自性を確信し、これを世人に周知せしめようとしたのであった。かれが自分の思想にたいしていだいていたなみならぬ自負は、あるいみで「誇大妄想」的と評価されるかもしれないような性質のものであった。ここではそれを端的に示す一例として、『産業体制論』（一八二一―二二）[30] の刊行中に公けにされた断片的論稿『続・ブルボン朝とスチュアート朝』（一八二二）の冒頭の一節をかかげておくことにしよう。

「陛下、精神・政治諸科学の方向における偉大な発見がなされたばかりであります。この発見は、われわれの社会組織の認識にとって、万有引力の発見が宇宙系にかんするわれわれの観念にとってそうであったのと同じくらいに、重要であります。この発見は、国民をその知識（文明）の現状に比例した仕方で組織することによって、陛下に平安と平穏を再建する手段を与えるでありましょう。この発見はさいごに、四〇年にわたるたゆみない研究の成果であるこの著作において、簡略に説明されています。わたしの著作の重要性について語るようわたしをかりたてたのは、決

して利己心の感情ではありません。それは、現在の危機を終結させる手段をみいだしたという、わたしの味っている満足であります。[31]」〔原典からの引用文中における（　）内は、原則として、別の訳語の可能性を示す。原文でこれが使用されている場合には、「カッコ内は原文」と明記する。以下同様。〕

サン＝シモン研究における反封建＝純粋資本主義視角の有効性は、サン＝シモンの社会組織思想の発展そのものによってのりこえられた、と思われる。少くとも、この視角をもってしては、サン＝シモンの思想に十分に内在しえない、したがってかれの社会組織思想の理論的進化を内側から描きだすことは不可能である、とわたしは考える。換言すれば、サン＝シモンの理論的＝実践的課題は、封建遺制の一掃＝純粋資本主義の確立、さらには「福祉資本主義[32]」や「組織された資本主義」の構築にあたったのではなくして、市民社会と政治的国家との分離＝二重化（あるいは両者の二律背反）の「止揚」による人間＝生産者の普遍的解放にあったのである。[33] かれが「政治的解放」におわったフランス革命の「逸脱」を反革命の理論家の批判とみまがうばかりのはげしさで批判しなければならなかった[34]のも、この課題を鋭く自覚していたからに他ならなかった。

サン＝シモンは『組織者』において成立をみる「産業アソシアション *association industrielle* の理論[35]」によってこの課題に答えられると確信した。これが、先にみた「偉大な発見」の含意である、とわたしは思う。そしてこのいみで、「産業アソシアションの理論」――それは、一言にしていえば、社会的管理の展開のなかで、政治的国家を無用化しうる新しい「社会関係」を創造しようとする理論である[36]――を思想的核心・頂点とするところのサン＝シモン産業主義の立場は、「古い唯物論の立場は市民社会であり、新しい唯物論の立場は人間社会あるいは社会的人類である[37]」（「フォイエルバッハ・テーゼ」第一〇）と宣言して、「国家と市民社会との止揚のための闘争[38]」（「市民社会と共産

主義革命」）を提起した『ドイツ・イデオロギー』のマルクスの立場を思想的に先取りないしは用意するとともに、（両者の直接的な思想の継承関係の有無にかかわる問題[39]をひとまずおくとしても）少くともその発想ないしは理論的枠組において、マルクスの未来社会論に接合しうるのである[40]、とは言えないであろうか。

以上によって、サン-シモン研究に（そして恐らくは、フランス社会主義のいくつかに）「市民社会と国家」という思想史の方法的「枠組」を導入することの必要性の一端が明らかにされたと考える。[41] とりわけ『産業論』から『組織者』にいたるサン-シモンの社会組織思想の歩みを内在的に追体験するためには、この「枠組」はきわめて有効であるし、不可欠であるようにも思われる。しかしながら、『組織者』以後のサン-シモンの作品を解析する場合には、この「枠組」の有効性について一定の留保を必要とする（そして、この点に後期サン-シモン研究の第二の困難が存在する。）というのは、『組織者』において生ずる自由主義思想とサン-シモン思想との「断絶」を強調するアンサールが、『組織者』におけるサン-シモンの「企図は、市民社会と国家という自由主義の伝統的な二元論的シェーマを排除し、それを生産社会の有機的ヴィジョン vision organique にとってかえることにあった」[42]と問題をなげかけているからである。すなわち、『組織者』においてサン-シモンが「新しい社会体制（システム）」（その内実が「産業アソシアシオン」）の理論を示しえた時、サン-シモンは「市民社会と国家」という「二元論」を放棄した、とアンサールはみるのである。[43] したがって、サン-シモン研究は一方で①「市民社会と国家」という方法的「枠組」の「復権」と「有効性」を主張しながら、他方で②サン-シモンがこの「二元論」の桎梏から「いかにして」脱脚しえたか、あるいは「何故に」脱脚しなければならなかったかを、かれの所説に則して説明しなければならないわけである。

これまでのサン-シモン研究史をふり返ってみると、『産業論』から『組織者』にかけてサン-シモンが夜警国家論

の擁護者からその批判者に転じたという「事実」（第一章、第一節参照）は指摘されているのであるが、かれが「何故に」そうならねばならなかったかについては、十分に説得的な説明が与えられていないし、この転換の過程を論理的に再構成する作業に成功した作品も見当らない[44]（アンサールの意欲的な労作も、「社会科学者」サン＝シモンの復権のためにサン＝シモンの著作全般からかれの像を再構成するという課題に制約されているためか、つまり思想形成史的なアプローチをこの課題に従属させているためか、この点については十分に明確ではない。）とはいえ、この問題に関しては、すでに内田義彦氏から示唆にとむ問題提起がなされているのである。内田氏は坂本氏の前記の研究にふれて、こう語っている。

「著者〔坂本氏〕は、サン＝シモンが初期の夜警国家的自由主義の立場から、次第に反自由主義的要素をつよめたといっているが、これを反封建から反自由主義として理解することは、あやまりでないとしても、その変化が時論のディメンションでのみとらえられて、組織思想の理論的深化がつかまれない。むしろ、かれの反封建は、さいごまで維持――むしろ、ブルジョワ的私的所有も封建的の中にふくみこまれることによって、拡大――され、ただ、そういう『封建的なもの』が、フランス革命以後、今日において、なぜ、いかなる形で再生しているかについてのかれの認識が深まるにつれて、反『封建主義』というかれの立場が、単純に反封建という形ではなく、封建主義を今日再生させている媒介的諸要因に対する批判という形で行われるとみるべきであろう。[45]」

私見をやや図式化していえば、この内田氏の問題提起にみられる「封建主義を今日再生させている媒介的諸要因」とはとりわけ「近代国家（政治的国家）」ないしは「統治関係」とこれを下から支える被治者の顚倒した意識構造のことであり、「組織思想の理論的深化」とは「産業アソシアション論」の成立をいみしていた。そして、サン＝シモン

の場合、「産業アソシアシォン論」の成立と同時に、「近代国家」ないしは「統治関係」の「止揚」（ないしは「解消」）の見通しが確保されたのであった（『組織者』）。したがって、サン-シモンが「何故に」夜警国家論の批判者に転じなければならなかったのかという問題は、じつはかれにおけるアソシアシォン論の成立のモメントを問うことに他ならないわけである。かくして、先に述べた（後期）サン-シモン研究の二つの課題、すなわち①サン-シモン研究における「市民社会と国家」という方法的枠組の有効性という問題（『産業論』から『組織者』にいたる過程の思想史的追体験にかかわる問題、とくに国家論の変容にかかわる問題）と②この二元論の放棄にかかわる問題、「生産社会の有機的ヴィジョン」（アンサール）つまりアソシアシォン論そのものにかかわる問題とは、①アソシアシォン論成立の必然性を明らかにすることと、②産業アソシアシォンそのものの具体的解明という二つの問題に置き直されることもできるのであり、さらにこの二つの問題は、市民社会と政治的国家の分離＝二重化の「止揚」というサン-シモンの直面していた難題に集約されるのである。（なぜなら、アソシアシォン論の必要性の自覚したがってその成立の必然性は、右の分離＝二重化の不合理性の自覚ないしはそれを「矛盾」と感じる鋭敏な感受性なしには不可能だからであり、②アソシアシォン論そのものの具体像を明らかにすることは、この分離＝二重化の「止揚」のありようを明示することなのであるから。）

以上のような次第で、わたしは、本稿の第一章で、右の第一の課題についてわたしなりの一つの解答を試みることにした。この場合わたしが念頭においたのは（あるいは心がけたのは）、『産業論』から『組織者』にいたるサン-シモンの思想の歩みを思想形成史的に再構成すると同時に、この作業の中でアソシアシォン論成立の論理的モメントを析出することであった。そして、この第一章をふまえて、続く第二・三章では、サン-シモンの産業アソシアシォン

の具体像を明らかにして（第二章）、かれが近代国家（統治関係）をどう「衰滅」ないしは「解消」させようとしたかをみることにした（第三章）。この意味で、第二・三章は先に述べた第二の課題について考えることを意図している。そしてこうした作業の全体をとうして、わたしは、サン-シモン産業主義の課題＝真のねらいが産業アソシアシォンの形成による市民社会と政治的国家の分離＝二重化の「止揚」（＝普遍的人間解放）にあったこと、この点にサン-シモン産業主義の先駆的独自性と「空想性」の根源を求めるべきことを主張しようと思う。

（注）

（1）François Marie Arouet Voltaire; *Candide ou l' optimisme*, 1759. 池田薫訳、白水社、一九三七年（一九四八年、第三版）、二四七、二五〇ページ。なお、人生の遍歴のはてに「労働」のなかに平安をみいだしたカンディードのイメージを長谷川四郎氏のそれに重ね合わせることによって、ソルジェニツィンの作品に独自の意味づけを与えている、大江健三郎「長谷川四郎・モラリストの遍歴」（『同時代としての戦後』、講談社、一九七三年所収）は、作家の「想像力」によって過去と現在と未来が結合され、歴史性と社会性を有する一つの作品世界が示された例として、興味ぶかい。

（2）Claude-Henri de Saint-Simon; *Letteres d'un habitant de Genève à ses contemporains*, 1803, *Œuvres de Saint-Simon et d'Enfintin*, Edition Dentu, Paris, 1865-76, vol. XV, p. 55. 大塚幸男訳『ジュネーブ人の手紙・他三篇』世界古典文庫、日本評論社、一九四八年、九〇ページ。以下、本書の訳文はこの訳書によっている（ただし、訳文の漢字―とくに代名詞―を、本稿の語調に合わせてかな書きにしたところがある。また、本書の題名は『ジュネーブの一居住民の手紙』と訂正したほうがよいと思われる。）引用文中の傍点は原文のゴシック。原典は原則として右の『サン-シモン全集』（*Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon*, Edition Anthropos, Paris, 1966, Tome I～VI. 第一巻から第五巻までは、『サン-シモン・アンファンタン全集』所収のサン-シモンの作品のリプリント）の第六巻で補うことにした。以下では、サン-シモンの作品については著者名を省略。原則として、『サン-シモン・アンファンタン全集』による場合は、書名と巻数で示し、新版『サン-シモン全集』による場合には、書名の次に O. S. T. VI のように略記する。

なお、新版『サン=シモン全集』で、第五巻までは旧『サン=シモン・アンファンタン全集』の編集方針がそのまま踏襲されたのは、老大なサン=シモン研究文献の多くのものが『サン=シモン・アンファンタン全集』のページ付けに従っていて、新たなページ付けを行うことが過去の研究文献における引用ページの指示の意味をそこねるためだ、と弁明されている。*Note des éditeurs*, O. S. T. I, pp. I～III.

(3) *Lettres d'un habitant de Genève à ses contemporains*, ibid., pp. 11 et 44. 大塚訳、五三、八一ページ。

(4) サン=シモンが思想形成の最初とその生涯の終りに、「社会組織」を主題とする作品を執筆している（*Extrait d'un ouvrage sur l'organisation sociale* [*Essai sur l'organisation sociale*], 1804, Ms. および *De l'organisation sociale, fragments d'un ouvrage inédit*, 1825, XXXIX.）ことは、かれが自己に課した課題が、基本的には一貫していたことを示している。サン=シモンの思想の多様性は、状況の変転のなかでこの課題に答えるための試行錯誤の表現とはいえないだろうか。なお、一八〇四年の社会組織論は『サン=シモン・アンファンタン全集』にも新版の『サン=シモン全集』にも収録されていないが、アルフレッド・ペレール編の単行書『ジュネーブの一居住民の手紙』の付録として公けにされている。Comte Henri de Saint-Simon; *Lettres d'un habitant de Genève à ses contemporains* (1803), *réimprimées conformément à l'édition originale et suivies de deux documents inédits : Lettres aux européene, Essai sur l'organisation sociale. Introduction par Alfred Pereire*, Paris, 1925. わたしは、小樽商科大学「手塚文庫」にて本書を閲読する機会をえた。関係者の方々のご好意に謝意を表したい。

(5) 復古王政期のフランス社会が、すでにブルジョワ社会（市民社会）としてのかなりの成熟度を示していたことについては、E. J. Hobsbawn; *The age of Revolution, Europe 1789-1848*, London, 1962.『市民革命と産業革命』、安川悦子・水田洋訳、岩波書店、一九六八年を参照。ホブズボームはこう述べている。「王政復古の社会は、復帰した亡命諸侯の社会であるよりもむしろ、バルザックの資本家と立身出世主義者の社会であり、スタンダールのジュリアン・ソレルの社会なのであった。」（*Ibid*, p. 183. 邦訳、一九三—四ページ。）つまり、新興ブルジョワの経済的覇権は動かしがたいところであった。

(6) サン=シモンは、かれが思想上の危機とすさまじい経済的な貧困にみまわれていた時（一八〇九—一三年）でさえ、こう語っている。①「わたしの生涯は、一言にしていえば、失敗の連続をみせている、とはいえわたしの生涯は失敗の生涯では

ない。というのは、わたしは下に降って行くどころか、常に上にのぼってきたからである。」(一八〇九年) ②「わたしの精神状態は、あまたの点で、わたしの金銭状態よりもさらにおもしろくない。わたしが受ける助言という助言は、わたしを落胆させがちである。しかも、こういう状態にあって、わたしは楽しんでおり、幸福である。わたしは自分の力を感じている。そしてこの感じはわたしが生涯で覚えた他のいかなる感じよりも愉しい。」(一八〇九年) ③「わたしの自分自身にたいする尊敬の念は、わたしが悪い世評を蒙むるのに正比例して、常に増大してきた。要するに、わたしは自分のなしてきた行為を誇る一切の理由がある。なぜなら、わたしは、わたしの同時代人にたいして、また後世にたいして、新しい有用な意見を提出することができるからである。……わたしは、まだ未来に生きているのである。」(一八〇九年) ④「二週間このかたわたしはパンを食べ、水を飲んでおります。わたしは火もなしに仕事をしており、原稿紙代にあてるために着物まで売り払ってしまいました。わたしが、このような窮迫の状態に陥ったのは、科学と公共の福祉とにたいする熱情からであり、ヨーロッパの全社会がはまりこんでいる恐ろしい危機をおだやかに終息させる手段を見つけたいとの念願からであります。」(一八一三年) *Œuvres de Saint-Simon, précédés de fragments de l'histoire de sa vie écrite par lui-même, publiés en 1832 par Olinde Rodrigues*, Paris, 1841. pp. XXX, XXXI, XXXVI—XXXVII et XXXVIII. (本書の閲読には九州大学図書館のご好意をえた。)『サン-シモン自叙伝』、前掲大塚訳書所収、四四、四五—四六、四九、五〇ページ。(大塚訳は、この『全集』を底本としている。) *Œuvres de Saint-Simon et d'Enfintin*, XV, pp. 77—78, 86—87 et 142. 但し、以上の手稿の年代については、ロドリーグ編の『全集』—実際には『選集』—にはよらず、『サン-シモン・アンファンタン全集』の編者とマッツォーネ (*Œuvres de Elaude-Henri de Saint-Simon, 1802～1825. Essai bibliographique par Alessandro Mazzone et Imgard Haase Mazzone*, Milano, 1963) の推定に依拠している。(ロドリーグ編『全集』では、前記①～③は一八一〇年と、④は一八一二年と推定されている。) また、『サン-シモン・アンファンタン全集』には、前記の②が欠けている (Cf. *Ibid.*, XV, p. 78.)

ロドリーグ編『全集』と『サン-シモン・アンファンタン全集』とでは、『自叙伝』の内容上の異同 (修正・付加・削除) がはなはだしい。『サン-シモン・アンファンタン全集』の編者は、こうした事情が生じた理由を、両者の有していたサン-シモンの手稿の「相異」に求めている。(*Ibid.*, XV, p. 87, *Note des éditeurs*) したがって『サン-シモン自叙伝』に関しては、少くとも二種類の手稿が存在した、と推定される。なお、一八一二—一三年のサン-シモンの状況については、さ

いきん緻密な実証的研究が公けにされた。André Thuillier; Saint-Simon en 1812-1813, *Revue d' histoire économique et sociale*, Vol. XLIX. No 1, 1971, pp. 55～93。

(7) マルクス『資本論』(長谷部文男訳、青木書店、第五分冊、八五五ページ。以下、邦訳はこれによる。)に付されたエンゲルスの注(一一六)を参照。ロシアの歴史家にして社会学者であったコバレフスキー(Kovalewsky)の証言(*Revue europèenne*, III, 1909 所収)によれば、マルクスは、晩年ロンドンでかれに会った際「生涯のはじめから、わたしがどんなにサンーシモン理論にかぶれていたかご存知でしょうか」と語ったとのことである。ギュルヴィッチは、この証言をサンーシモンの思想のマルクスへの直接的影響を示す有力な論拠とみなして、青年マルクスの思想(とくに『ヘーゲル国法論批判』のそれ)とサンーシモン思想との「類縁関係」を確定しようとしたのである。G. Gurvitch; *La vocation actuelle de la sociologie*, T. II. Deuxième éd. refondue et augmentée, Paris, 1963, p. 231.

(8) エンゲルス『空想から科学へ』寺沢恒信・山本二三丸訳、国民文庫、大月書店、六六ページ。以下邦訳はこれによる。

(9) デュルケームによってはじめて提起された、「社会科学(の建設)者」というサンーシモンの像を現在の研究水準にたって再構成し復権しようという野心的な研究意図をもつアンサール(ギュルヴィッチ門下の社会学者)は、(後期の)サンーシモンの思想が「労働社会学」、「政治社会学」、「知識社会学」の三つの領域にまたがっていると指摘している。Pierre Ansart; Sur l' objet et tola méthode des sciences sociales, *Economies et Sociétés*, T. V, No. 4, Genève, 1970, P.33 (641). この論文は、ペルー(François Perroux)とシュル(Pierre-Maxime Schul)の指導のもとで、《*Saint-Simonime et parti pour l' industrie xix*e*-xx*e *siècles*》と題して推進されたサンーシモン主義の総合研究——現在までに前記『経済と社会』誌上で4回の特集号がくまれた——の一環として、公表された。

(10) マルクス『資本論』、前掲、第五分冊、八五四ページ。エンゲルスは、この個所に注を付して、「マルクスが原稿に手を加えたとすれば、きっとこの個所をひどく修正したにちがいない。この個所は、フランスにおける第二帝政下の元サンーシモン主義者たちの役割に影響された」(同上書、八五五ページ。注一一六)ものである、と語ったのであった。エンゲルスのこの示唆にとむ指摘を、マルクスの(書き残した)評価のみに準拠してサンーシモンを語る人々は、無視ないしは忘却しているのではなかろうか。

(11) エンゲルス『空想から科学へ』、前掲、寺沢・山本訳、五九ページ。正確には、「サンーシモン、かれにあっては、プロレ

タリア的傾向とならんで、ブルジョワ的傾向がまだある程度の力をもっていた。」

(12) 水田洋・珠枝『社会主義思想史』、東洋経済新報社、一九五八年、一八〇ページ。現代教養文庫、増補新版『社会主義思想史―一五一六～一八四八―』、社会思想社、二三三ページ。(「初期社会主義」の章は、水田洋氏執筆)。なお、現代教養文庫版には、二つの補論(「マルクス主義の三つの源泉について」、「研究の展望」)が付され、著者のマルクス主義の「源泉」問題についての理解が明示される(補論一)とともに、旧版出版後の研究状況の概観が(書評あるいは学界展望という形で)与えられている(補論二)。

(13) この点については、服部文男「サン=シモンの空想的社会主義における階級分析」、『経済学』(東北大学)、第四三号、一九五七年「序」を参照。服部氏の研究意図は、当時のヨーロッパ・マルクス主義におけるサン=シモン低評価にたいして、サン=シモン思想の「空想性」の意味を再発見することにあった。服部氏は、ベルギーのサン=シモン主義者ルモニエ編の『サン=シモン選集』(Charles Lemonnier; *Œuvres choisies de C.-H. de Saint-Simon*, 3 vols, Bruxelles, 1859)を主に利用している。この選集は、『サン=シモン・アンファンタン全集』に収録されなかった多くの作品を収めていて貴重であった。しかし、それらが新版『サン=シモン全集』の第六巻に収録されたことにより、この選集の固有の意義はかなり減少した。またこの選集には、わたしの重視する『組織者』は、その抜萃しか収められなかった。

(14) Roger Garaudy ; *Les sources françaises du socialisme scientifique*, Paris, 1948. 『近代フランス社会思想史』、平田清明訳、ミネルヴァ書房、一九五九年。

(15) 服部文男、前掲論文、六六ページ。

(16) 水田氏の結論から出発された坂本氏はこう述べる。「一方では『アメリカの純粋培養型資本主義』(水田洋氏)の理想がサン=シモンの産業社会の構想にとりいれられ、この理想にてらしてフランス社会の封建遺制がはげしく攻撃される。他方では、とりわけ弟子たちにおいて、『イギリスの自由放任型資本主義』の矛盾が告発され、ここから、組織的、計画的なフランス産業革命の独自のコースが設定される。」坂本慶一『フランス産業革命思想の形成――サン=シモンとサン=シモン派』、未来社、一九六一年、四―五ページ。もっとも水田氏自身の言によれば、氏の研究の真意は、坂本氏に誤解されたとのことである。また、坂本氏のサン=シモン(主義)研究における秘められた研究意図は、スターリン主義化されたマルクス主義の「相対化」にあった、といわれている。坂本説に関しては、野地洋行氏の評価(『三田学会雑誌』一九六二年三月号。『経

済学史学会関西部会通信』第八号、一九六二年。『経済学史学会年報』第五号、一九六七年）をも参照。

(17) 『産業論』におけるサン-シモンが、いわゆる西ヨーロッパ型の「封建制」を欠くアメリカ社会の「賛美者」であったのは「あるアメリカ人へのアンリ・サン-シモンの手紙」の第二書簡の一節から明らかであって、水田洋氏もこの個所を氏のサン-シモン像の典拠としておられる（水田、前掲書、旧版、一八一ページ。現代教養文庫版、二三四ページ。）しかし『組織者』・『産業体制論』という二つの重要な作品――水田氏はこれらの分析を欠いている――の後で公にされた啓蒙書『産業者の教理問答』（ロドリーグ編『全集』では、『産業者の政治的教理問答』）第一カイエ（一八二三）の「補遺（付録）」として書かれた「合衆国にかんするノート」になると、アメリカ社会にたいする賛美はきえ、この社会にかんする冷静な観察と批判が登場する。すなわち、この「ノート」でサン-シモンは、合衆国の全市民が「法の前で平等」であり、「いかなる肩書も、特権も、出生の権利」をも享受していないにもかかわらず、次にみるような諸点を考慮にいれて、合衆国が「統治制度 régime gouvernemental を再建する」危険性を指摘するのである。①合衆国の市民法典はイギリス市民法の模倣であって、それは「貴族、無為徒食の所有者、とりわけ司法をとりおこなう人々」の利害において作られている（傍点は引用者）。その結果、法律家と司法制度が優先し、裁判は長期化し、莫大な訴訟費用がかかる。②急速な人口増加によって、人口が西ヨーロッパなみになると、土地所有者は産業者でなくなるであろうが、この時かれらは、現在の市民法のなかに「出生の諸権利」を再建するために必要なすべての規定をみいだすだろう。③軍人が政府の中で重要な地位をしめていること。④社会組織の完成をめざす「政治学」研究のたちおくれ。⑤産業体制の確立に必要な「精神労働」従事者（とくに学者と芸術家）の不足。⑥合衆国の人民は知識よりも富に野心をもっていて、「人間に最大の富を獲得させるのは、実証諸科学である」ということを自覚していない。以上をわれわれの言葉でいえば、いわゆる「封建制」なしの状態から出発したにもかかわらず、右にみた状況を廃棄しえないかぎり、アメリカ社会もまた新しい「封建制」つまり近代社会に固有の抑圧的人間関係（統治関係）を必然化するだろう、とサン-シモンは予見していたと思われる。そしてこの点にかかわる危機意識をもたないアメリカ人を、かれは結論的にこう批判している。「アメリカ人は、政治的にはまだ子供にすぎない。アメリカ人は、かれらの人口に比して莫大すぎる土地を所有することでかれらが享受している利益によって甘やかされている子供である。」*Note sur les Etats-Unis, Œuvres de Saint-Simon……Publiées par Olinde Rodrigues*, op. cit., pp. 167-173.（このノートは『サン-シモン・アンファンタン全集』にも、新版『サン-シモン全集』にも、その存在が指摘されながら〔XXXⅦ, p.

107 note 1.『産業者の政治的教理問答』高木暢哉抄訳、世界古典文庫、一九四八年、八八ページ。『世界大思想全集』社会・宗教・科学・思想篇一〇、河出書房新社、一九五九年、四六ページ)、なぜか収録されなかった)「アメリカ革命の英雄」にして「フランス革命の子」であったサン=シモンにみられるアメリカ評価の変化、したがって近代社会認識=批判の深化を物語る右の文献的事実は、サン=シモン産業主義がたんなる純粋資本主義論でないことを、あるいはかれが純粋資本主義の賛美者にとどまりえなかったことを端的に示すものであろう。では、サン=シモンは資本主義あるいは「産業革命」とどうかかわったのであろうか。私見によれば、かれは、資本主義を賛美したり、あるいは産業資本の確立を意図的・第一義的に促進しようとしたのではない。資本主義的生産の社会的・共同的性格に着目するとともに、西ヨーロッパ近代史の発展の基底に人間と自然との物質代謝の拡大をみいだしたかれは、生産的実践(生産活動)に適合的な社会関係を組織化すること(産業アソシアションの形成)によって、市民社会と政治的国家との二律背反を止揚し、もって人間を「生産者」として普遍的に解放しようとしたのである。このいみで、サン=シモン理論の歴史的帰結からかれを産業資本のイデオローグあるいは産業革命の使徒とみたてるようなサン=シモン評価は、サン=シモン像を歪少化するものだといえよう。また、サン=シモン理論の「ねらい」とその歴史的運命との「ずれ」は、プロテスタンティズムと資本主義の成立との関係ににかよった一つの歴史的イロニーなのではなかろうか。なお、この問題を考えるには、水田氏の次の指摘が示唆的である。「マルクスが三人の空想的社会主義者すなわちサン=シモン、フーリエ、オーエンをたかく評価したのは、かれらが空想的=体制変革的であったということだけによるのではない。かれらはいずれも、この変革と生産力の上昇とを、十分にではないがとにかく、むすびつけていた。そのいみでは、かれらは、資本主義の発展にたいして、けっして空想的ではなかったし、そのいみではまさしく、ブルジョワ的でさえあった。」水田、前掲書、旧版、九ページ、現代教養文庫版、一四ページ。

(18) 水田洋・珠枝、同右、一八九ページ。現代教養文庫版、二四一ページ。本文の引用文中にいわれている、サン=シモンの「ブルジョワの立場」に関する水田氏の理解については、右の注(17)末尾の引用文を参照。

(19) 坂本慶一、前掲書、一一―一六ページ。坂本氏の研究史の整理の仕方は、水田氏によって、「研究史じたいが思想史であることをわすれている」と批判されている。水田洋「初期社会主義の研究(一九六二―一九六三)」、前掲書、現代教養文庫版(補論二に所収)、三〇四ページ注2。

(20) 坂本慶一、前掲書、一六ページ。

(21) 同右、四ページ。引用文中に補足しておいたように、坂本氏は産業革命思想としてのサンーシモン思想の「早熟性」を主張する。これに対して、エンゲルスは社会主義思想としての「未熟さ」を指摘したのであった。したがって、坂本氏のエンゲルス説を援用してのエンゲルス批判は的はずれなのである。

(22) エンゲルス『空想から科学へ』、寺沢・山本訳、六六ページ。より厳密にいえば、サンーシモンの思想は「国家廃止」論であるよりも、「国家死滅」論に近い。

(23) 例外は前記の服部論文、とりわけ田中清助氏の研究（「サンーシモンとマルクス」、『思想』、一九六五年、六月号。「サンーシモンとマルクス(続)」、『思想』、一九六六年、一月号。「科学的社会主義の成立」、『思想』、一九六六年、五月号。「空想的社会主義とマルクス主義」、樺俊雄編『史的唯物論と社会学』、法政大学出版局、一九六八年所収）である。「マルクス主義的研究者のなかにもあるサンーシモンの低い評価は、ブルジョワ・イデオローグがサンーシモンを利用しようとして描きだす画像に奇妙にも接近する」とみる田中氏は、「サンーシモン問題」が「今日的な状況のなかでの組織された資本主義論者としてのサンーシモン像と、空想的社会主義者としての像との対決」を中軸にして展開されるべきだ、と考えておられる。（「サンーシモンとマルクス」、五六ページ。）さらに、田中氏の次の指摘は、せまくは「サンーシモン問題」、ひろくは「サンーシモンとマルクス問題」を考える際の理論的枠組の要諦をなす。「〔サンーシモンの場合には、ルソーと対照的に〕社会の観念が抽象的であり無限定であるが故に、限定してくる国家観念を突破し、あるいは対抗する傾向をもちうる。……そのような社会はユートピア的たらざるをえないが、革命思想に結びつき、あるいはそれの基礎づけの役をはたす。けれども、無限定的な性質から、それがかえって現実的限定的な国家を支える虚疑意識に転化する可能性につきまとわれている。／社会の所在をつきとめようとする社会理論は……社会と国家との単純な二分的対置〔わたしの表現でいえば二元論〕の図式に依拠している。サンーシモンは国家衰滅を予感しつつそれへの過程に目を向けようとした点で単純な図式化には陥っていないが、それと手を切ることもできなかった。（「科学的社会主義の成立」、六〇ページ、注1、斜線は段落の切れ目を示す。）但し、わたしは、サンーシモンの後期の思想全体（とくに『組織者』・『産業体制論』と『新キリスト教』にみられる思想）について、こう断定できるとは考えない。また、田中氏はサンーシモンが「社会と国家を対置してきりはなす社会学的図式にひきずられた」と評しておられる（同論文、六〇ページ）が、こうした評価は『組織者』以後の思想については、全面的に妥当するであろうか。わたしがこう述べる論拠については、行論の全体から判断していただきたい。なお、序論、注42をも参照。

(24) 本節、注(10)を参照。

(25) 内田義彦『日本資本主義の思想像』、岩波書店、一九六七年、三〇六ページ。引用部分の前後には、著者の思想史研究の方法――とくにフランスを研究対象にする場合の方法上の留意点――が簡潔に示されている。また、木崎喜代治「ルソーにおける経済と国家」(『専修経済学論集』、第九号、一九七〇年)も、「ルソーにおける政治理論と経済理論との関連の解明を重視しなかった」(同、一二七ページ)わが国ルソー研究のあり方に反省を迫っている。

(26) 広田明「サン＝シモンの未来社会論(上)」、『経済科学』(名古屋大学)、第一九巻第三号、一九七二年を参照(とくに第二節)。この前稿で、わたしは、サン＝シモン的な夜警国家論が「(国家の)専制と(市民社会の)無政府性との二律背反の自覚のなかから生れたのであった」(同右、二七ページ注9)と述べたが、この理解は誤りであるので、ここに記して訂正させていただく。(この点の詳細については、第一章、第三節を参照。)『産業論』のサン＝シモンの思想において「二律背反」の関係にあったのは、「国家の専制」と「市民社会の無政府性」ではなくして、「国家の専制」と「産業の自由」なのである。(「国家の専制」と「市民社会の無政府性」は、むしろ相互補完的な関係にたつ。)そして、この「解けない二律背反」(マルクス)を、ヘーゲルの理性国家におけるごとくみせかけの「解消」におわることなく、サン＝シモンがいかに「止揚」しようとしたかについては、とくに第二・第三章を参照されたい。

(27) この点については、本稿の続稿として予定されている「サン＝シモンのフランス革命論とイデオロギー批判」(仮題)において、中心的な論題の一つとなるはずである。ここであらかじめ言っておけば、『組織者』以後のサン＝シモンは、二つの「封建制」概念――「旧封建制」と「新封建制」――を使いわけながら(むしろ後者の危険性を重視しつつ)、「人間の抑圧関係一般」を批判するのである。これは内田義彦氏のいわれる「新たな戦線のひき直し」(内田、前掲書、三〇一ページ)にかかわる論点でもある。また権上康男氏によれば、フランスでは一九世紀の末においても oligarchie(寡頭制)といういみで féodalité の概念が用いられているとのことである。例えば、féodalité financière というふうに。

(28) サン＝シモンが「純粋資本主義」論者にとどまりえなかったことを示す「事実」については、本節注(17)を参照。アンサールは「一八二〇年頃には、封建制の克発はあらゆる自由主義思想家に共通のテーマであった」と語って、サン＝シモンの自由主義批判の意味を解明しようとする。P. Ansart; *Sociologie de Saint-Simon*, Paris, 1970, p. 203.

(29) わたしの未達成の研究課題の一つは、サン＝シモンの原像を発掘しなおすことによって、自由主義者の描くサン＝シモン像

からサン-シモンを解放することにある。自由主義者のサン-シモン研究が無意味だというつもりは毛頭ないが、サン-シモン研究史が一つのイデオロギー史でもあるという点、この点は自由主義的サン-シモン解釈から学ぶ際にとくに銘記すべきである。たとえば、ハイエクやイガースに代表されるアメリカのサン-シモン（主義）研究の一潮流（F. A. Hayek; *The Counter-Revolution of science*, Illinois, 1925. Georges G. Iggers; *The social philosophy of the Saint-Simonians*, 1825-1832, Chicago, 1951. Ditto; *The Cult of Authority. The political philosophy of the Saint-Simonians. A chapter in the intellectual history of totalitarianism*, The Hague, 1958. Ditto; Le saint-simonisme et la pansée autoritaire, *Economies et Sociétés*, T. V, No 4, 1970. pp. 673-691）がサン-シモン（主義）研究という名のソヴィエト体制論でもあることに注意。（この点は松田芳郎氏よりご教示をえた。）また、本国フランスにおける自由主義的サン-シモン解釈には、デュノワイエ（Charles Dunoyer; Notice historique sur l'industrialisme, *Revue encyclopédique*. février, 1827）にはじまり、グゥイエ（H. Gouhier ; *La jeunesse d'Auguste Comte et la formation du positivisme*, Paris, t. II〈1936〉, t. III〈1941〉）を絶頂としてアロン（Raymond Aron; *Les étapes de la pensée sociologique*, Paris, 1967, p. 19）にいたる（さまざまの変種をうちにふくむところの）長い伝統があるので、本稿の論題とはなしえなかったが、最近ではバティ（コンスタンとシエースの研究者として著名）がこの伝統の限られた一面をかなり低い水準で再確認している。（Paul Bastid; Benjamin Constant et le saint-simonisme, *Economies et Sociétés*, T. V, No 6, 1970, pp. 285-289）。なお、坂本慶一氏の「実証的」研究（前掲『形成』）では、自由主義的サン-シモン像にたいする著者の姿勢があいまいである。以上に述べた諸点については、服部文男氏の先駆的研究（前掲論文）やアンサールの次の指摘から学ぶべきである。アンサールは大略こういっている。サン-シモンの未来社会論を「私的な経済的業務への国家の介入の単純な正当化と解すことはできなかろう。これは、自由主義的理論家たちが必ず念頭においていた解釈であった。」単に企業家の自由の尊重に敏感であるにすぎなかったこの自由主義的パースペクティブにたつと、サン-シモンの諸テーゼは企業家の独立をおびやかすものとみなされうるし、また、サン-シモンの理論が「経済に外在的な権力の正当化」あるいは「産業家の活動への国家の介入の正当化」とも考えられよう。だが、サン-シモンの思想はそんなものではないのであって、われわれは、この「歪曲」のなかにこそ「自由主義思想とサン-シモンの企図とのあいだのこえがたい断絶—とくに一八二〇年の著作『組織者』において生じる断絶—を看取するのである。」（Pierre Ansart; *Sociologie de Saint-Simon*, Paris, 1970, p. 160）ただし念のためにいえば、アン

サールは、こうした自由主義的サン=シモン像の規定だけでなく、自由主義とサン=シモン産業主義との親近性を主張することによってサン=シモンの独自性を否定ないし疑問視する別の形でのサン=シモン論をも視野に入れている。

(30) いわゆる『産業体制論』の第一部は、一八二〇年に『組織者』出版直後に公表された書簡体の小冊子を合本したものからなる。サン=シモンがこれらに『産業体制論』という総括的な名称を与えて出版したのは、一八二一年のことなので、（本書の出版開始を一八二〇年としても誤りではないが）本書については、一八二一―二二年説をとった。また、こうした出版事情からみても、『組織者』と『産業体制論』の問題意識の連続性が留意されるべきこと、したがって両著作がその内面的連関に注意して読まれるべきことを、わたしはここで強調しておきたい。

(31) *Suite à la brochure des Bourbons et des Stuarts* (1822), O. S. T. VI, pp. 507-8.

(32) 永井義雄「初期社会主義」、講座『世界歴史』一八、岩波書店、一九七〇年、四六一ページ。

(33) 序論、注（17）の後半を参照。

(34) この点については、別稿を予定している。序論注（27）を参照。

(35) Pierre Ansart; *Sociologie de Saint-Simon*, op. cit., p. 21. 序論注(24)後半の引用文参照。サン=シモン自身による「産業アソシアシォン」des associations industrielles 概念の使用例については、*Du système industriel, deuxième partie* (1821), XXII, p. 185 をみよ。

(36) サン=シモンにおけるアソシアシォン論の重要性については、田中清助氏の労作（「マルクスにおける Assoziation の概念について」社会学評論、七一号、一九六七年）から教えをうけたが、サン=シモン産業主義にしめるこの理論の意義は、田中氏が予想された以上に大きいと思われる。

(37) 『マルクス=エンゲルス全集』、第三巻、大月書店、五ページ。

(38) 同右、五九六ページ（九ノ二）。

(39) 少年期のマルクスがサン=シモン（主義）的な環境のなかに身をおいていたことをはじめて指摘したのはコルニュ(Auguste Cornu; *Karl Marx et Freadrich Engels*, Paris, t. 1, 1955, p. 67)であったと思われるが、ギュルヴィッチとアンサールは、コルニュの指摘を肯定的に発展させながらも、問題のたて方あるいは力点のおき方を大胆にかえようとしている。すなわち、ギュルヴィッチとアンサールは、①全体社会を決定づける支配的な力を市民社会の内部に求めて国家幻想をうむこと

なく批判するとともに、産業の歴史的興隆＝進歩のなかに国家の外在化の基礎をみいだしたサン-シモン、そして生産を目的意識的に再組織し、社会を合目的的・合理的な活動の場たらしめることによって、生産者を普遍的に解放しようとしたサン-シモン、このサン-シモンの problématique と青年マルクスのそれとの親近性・共通性・類縁関係を明らかにすることで、かえって両者の真の独創性を確認しようとするとともに、②青年マルクスにヘーゲル法哲学批判が可能だったのは、マルクスが（ヘーゲル→フォイエルバッハの論理・発想ないしは現実認識だけでなく）サン-シモンの problématique を共有ないしは継承していたからだとみるのである。サン-シモンとマルクスの思想の直接的な継承関係をうらずける資料がとぼしい以上―『ドイツ・イデオロギー』におけるマルクスのグリューン批判は、マルクスがサン-シモンの原著（の一部）を熟知していたことを教えてはいるが――いわゆるマルクス主義の「三の源泉」問題におけるサン-シモンの位置づけの問題にはヘーゲルやスミス・リカードに対するのとは異なる姿勢が要求されるし、この問題にとってもサン-シモン像の復原が不可欠の前提をなす。ギュルヴィッチとアンサールの所説については、次の作品を参照。George Gurvitch; *La vocation actuelle de la sociologie*, T. II, Deuxième édition refondue et augumenté, op. cit., pp. 230―5. Du même; *C.-H. de Saint-Simon. La Physiologie Sociale. (Œuvres choisies*, Paris, 1965, pp. 35-40. Pierre Ansart; *Marx et l' anarchisme*, Paris, 1969, Introduction et 3e Partie chap. 1er. Du même; *Sociologie de Saint-Simon*, op. cit., p. 181. Du même; Sur la théorie des déterminismes sociaux chez Marx, *Perspectives de la sociologie contemporaine. Hommage à George Gurvitch*, Paris, 1968, p. 344. ギュルヴィッチの初期マルクス解釈はリュベールによっても肯定されている。M. Rubel; Saint-Simonisme et Marxisme, *Economies et Sociétés*, T, IV, No 6, 1970, p. 207. なお、わが国では、周知のように田中清助氏（「サン-シモンとマルクス」前掲）が、コルニュ説を発展させてサン-シモンの思想をマルクス史的唯物論成立史の不可欠のモメントとして復権されようとしているが、氏の所説にたいする評価は多様である。田中説に対して最も包括的な批判と反証を示され、青年マルクスの思想形成史にしめるフランス思想（啓蒙主義をふくむ）の積極的意義を否定されたのは、広松渉氏（『青年マルクス論』、平凡社、一九七一年）であった。

(40) 坂本慶一氏も、われわれとは力点のおき方を異にするがやはり、サン-シモンとマルクスの「視角」の論理的継承関係、「論理構造」の同一性を指摘しておられる（坂本『マルクス主義とユートピア』紀伊国屋新書、一九七〇年、一〇〇、一〇八ページ。）この点については、さらに内田義彦、前掲書、九三ページをも参照。

(41) 本稿序論で示されるサン=シモン研究の枠組でブルードンの思想を考える場合には、次にあげる佐藤茂行氏と坂上孝氏のブルードン研究が有益であった。佐藤「ブルードンの〝系列の理論〟について」その(1)、その(2)、北海学園大学『経済論集』、第一八号、一九六七年、第一六巻、第一号、一九六八年。同「ブルードンの経済学体系について」、北海道大学『経済学研究』、第二巻、第二号、一九七〇年。同「ブルードンとヘーゲル主義」、『経済学研究』、第二巻、第二号、一九七一年。同「レオンワルラスのブルードン批判について」、『経済学研究』、第二二巻、第一号、一九七二年。同「ブルードンと『労働者階級の政治的能力』について」、吉武清彦編『社会政策学の現代的課題—新川士郎教授還暦記念論文集—』所収、北海道大学図書刊行会、一九七三年。同「ブルードンと古典経済学」、『経済学研究』第二三巻、第二号、一九七三年。坂上「ブルードンにおける所有・国家・革命」、『社会思想』、二巻二号、一九七二年所収。

(42) Pierre Ansart; *Sociologie de Saint-Simon*, op. cit, p. 160. この点をアンサールは別の個所では、次のようにとらえている。「この著作〔『組識者』〕のタイトルが示すように、サン=シモンはその時〔一八一九—二〇年〕防衛的な理論〔夜警国家論〕から有機的構想におもむき、今日ならわれわれが経済的・社会的計画化の理論と名ずけうるであろう、産業アソシアシオンの理論をはじめて定式化する」(*Ibid*, p.21)。

(43) このアンサールの理解は、田中清助氏のサン=シモン評価（序論、注23参照）と重なり合いつつ、対立する。

(44) 吉田静一氏の簡潔・明快にして要をえたサン=シモン論（「自由主義・産業主義・社会主義」、『未来』、一九七三年七月号）では、この点との関連で、テオクラット（神政派）の「反動的な伝統主義の影響」と自由派に対する「幻滅」（同、一六ページ）という外的・内的な二要因が指摘されている。しかし、氏におかれては、サン=シモンが「何故に」一方ではメストルやボナールの思想をうけとめ、他方で自由派に「幻滅」しなければならなかったのかという問題が、サン=シモンの社会像、社会組識論との関連で深くほりさげられていない。また、氏がサン=シモン産業主義の形成を「政治論から経済論へ……の転回」（同、一四ページ）と評価されることも、正確さを欠く（第一章、第二節参照）。氏におかれては、よどみない叙述のためにかえってサン=シモン像が犠牲にされている、という印象をわたしはもった。（わたしは、サン=シモンの思想の中でモヤモヤとしていてなかなかつまらないものをできるだけくみとって、それらにイメージを与えてみたい。）このことは、吉田氏の旧稿（「批判と構想力」、『展望』、一九七二年二月号）のサン=シモン論についてもあてはまる。シスモンディとサン=シモンの像を「結合」することによって、現代史に積極的にアプローチされている吉田氏の姿勢は、フラン

ス思想史・学史研究の「現代的」意義とそのあり方を示す好例として、たいへんに興味ぶかい。しかし、吉田氏がサン-シモンの「現実批判は、シスモンディほどにラディカルであったかどうか。それは疑わしい。」（同右、七七ページ）と語るとき、氏の視野からはサン-シモンが悪戦苦闘しなければならなかった「近代国家」の問題が消えている（シスモンディの「保護的権力」としての国家にはふれられているが……。）氏が「問題は、シスモンディにおけるラディカルな現実批判とサン-シモンにおける未来社会の構想力との結合にあったし、いまもある。」（七九ページ）というのは、一般論としては、正しいかもしれない。だが、問題を一歩進めて、「何故に」サン-シモンにとって「未来社会の構想」が必要だったのかと問いなおすならば、いわゆる「二重革命」（ボブズボーム）の「衝撃」にたいするサン-シモンのかかわり方が再検討されねばならないはずである。この点に関するわたしの意見を必要なだけ述べるのは、本稿の枠を大きくふみはずすことになるのでここでは自説のくわしい裏づけは行わないが、（フランス革命によって完成される）市民社会と政治国家の分離＝二重化を「止揚」するために――念のためにいえば、この「止揚」がサン-シモン理論だけで可能だというのではない。かれはこの難題の解決に不可欠な理論的枠組を提起した。――サン-シモンは近代社会＝資本主義の「生産力」に着目した、あるいはこの難題に答えるために、産業革命の「衝激」をポジティブに受けとめて、「未来社会の構想」を提示しなければならなかったというが、私見のポイントになる。このいみで、フランス革命の「衝撃」のほうが「サン-シモン問題」にとっては決定的ないしは第一義的である。（思想形成史的にみても、サン-シモンではフランス革命問題がいわゆる産業革命問題に先行しているが、わたしがサン-シモンの未来社会論の検討をフランス革命論のそれに先行させた――本稿と続稿との関係――のは、サン-シモンにフランス革命の総括的な批判が可能になるのは『産業体制論』においてだからである。つまり、『産業体制論』にみられるフランス革命像は、前作『組織者』でかれが未来社会のイメージを確立した暁にはじめて可能になったからである。）吉田氏の場合には（同右、七二―四ページ）、この問題の整理の仕方が、やや平板であって、その結果、サン-シモンのフランス革命批判が革命にたいする単なるルサンチマンとは思想の質を異にしている点の解明が不十分なままに終っているように思われる。

このようなサン-シモン像からすれば、サン-シモンは単なる「産業化」の唱導者あるいは人間解放・「社会」解放の視点を欠落させた「産業社会」・「産業主義」のイデオローグとは、その思想の質と歴史的性格を全く異にしているのであって、シスモンディとは別の意味においてではあるが、現実にたいしてラディカルな批判者たりえたのである。ともあれ、われわれ

は、サン＝シモンにおける「二重革命」の問題を考える場合には、啓蒙思想によって示された「理性国家」（近代国家）・「理性社会」（近代社会）にたいする「幻滅」の「確認者」、「フランス大革命の子」というエンゲルスのサン＝シモン像（『空想から科学へ』、寺沢・山本訳、六二～六三ページ）を常に念頭においておくべきであろう。（フランス革命期のサン＝シモンについては、さしあたり、広田、前掲論文、三四ページ注4を参照。）

サン＝シモンにおける「二重革命」の問題は、坂本慶一『マルクス主義とユートピア』（前掲）でも論じられている。河野健二氏（『思想史と現代』、ミネルヴァ書房、一九六八年）がフランス社会思想の「独自性」の一つとして強調されている「人間疎外」の批判とその回復のための処方箋の提示という論点をフランス社会主義分析の視角としてひきついだと思われる本書では、前作『形成』よりもサン＝シモンにおける「フランス革命の衝激」（『ユートピア』二五ページ）が重視されるようになったようである。しかし本書では、前作『形成』と「フランス産業革命の胎動と社会思想」（出口勇蔵編『社会思想史』別冊、筑摩書房、一九六七年）にみられる純粋資本主義論の視角からのサン＝シモン像と疎外論視角からのそれとが十分に統一されないままに提示されているという印象をぬぐいきれない。たとえば、坂本氏は、一方で「政治革命に実質的・経済的内容をあたえること、政治革命につづく経済革命を遂行すること」（同右、二五ページ。この表現はあいまいである）にサン＝シモン産業主義の「現実的基盤」を求めながら、他方で生産者が非生産者に従属するという人間疎外の状況、すなわち「さかだちした世界」から「産業者階級を解放するためには、形式的なフランス革命にかわって実質的な革命が必要である」（同右、二七ページ）ことを指摘されているからである。つまり、氏におかれては「政治革命につづく経済革命」と「形式的なフランス革命にかわる実質的な革命」との関連が、明確に把握されていないのではなかろうか。かくして坂本氏は、サン＝シモンの希求する「一大革命」が「科学と産業の優越する社会への移行を画するものとみるかぎり、歴史上の産業革命を示すものといえよう。しかし、サン＝シモンが予想する革命は、単なる経済革命以上のものであり、それは同時に政治や社会の組織変革のみならず、精神構造の変革をも含むものである」、（同右、二八―九ページ）、この革命は「一面において、歴史上の産業革命を包含しているかぎりにおいて、現実的であり、あるいはブルジョワ的である。しかも半面において、かれの主張が産業革命そのものをストレートに容認するものではないというかぎりにおいて、反ブルジョワ的であり、また一つのユートピアである」（同右、三〇―一ページ）と語って、やや折衷的なサン＝シモン像を示されることになった。この点はやや観点をかえて別稿で論じてみたいが、結果からみると、本書のサン＝シモン像は、基本的には純

粋資本主義論の視角でサン-シモンをみながら、それからはみでるものを疎外論視角で補完するという形で再構成されているように思われる。なお、野地洋行氏は、坂本氏のサン-シモン研究がサン-シモン思想の「生産力的な面」したがってそのブルジョワ性・非空想性・現実性を明らかにした功績を評価しながらも、サン-シモンが「産業資本の支配確立」という意味での産業革命をめざしはしなかった点を、強調されている。野地「フランス社会主義思想」、『経済学史学会年報』第五号所収、前掲、二一ページ。

(45) 内田義彦、前掲書、三一三—四ページ。サン-シモンの反自由主義への転換のいみについては、Ansart ; *Sociologie de Saint-Simon*, op. cit., pp. 202-3 をも参照。